

知られざる大崎の歩みを訪ねて。【ものづくり編】 日本の近代工業化の始まりは、目黒川のほとり、大崎から

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA（原風景）を訪ねる『おさき今昔物語』。
その第三十一話は、日本の近代工業化への先駆けの地ともなった目黒川流域、その核となる大崎周辺エリアのものづくり産業の歩みを辿ります。
明治時代の殖産興業化への流れに乗って誕生した洋式ガラス製造工場など、幅広い分野に及ぶ“先端工業の地”大崎の姿がそこにありました。

Product co, History

大崎の主なものづくり企業の歩み

- 明治9年 日本初の西洋式硝子製造工場
1876 (品川硝子製造所) 誕生
- 明治20年 耐火煉瓦の製造を目的とする品川白煉瓦製造所、大崎に移設。
1887 その後、日本各地の著名な公共的施設に先進技術の耐火煉瓦(白レンガ)が使われるなど、ものづくりのまち大崎の近代工業化を牽引していく
- 明治25年 品川硝子製造所解散、日本各地に散った職人たちにより硝子産業が全国に拡散する
- 明治31年 日本ペイント製造(株)(※後の日本ペイントホールディングス)、日本初の塗料工業会社としてスタート。技術革新に基づき広範な分野のニーズに応えた各種塗料製品を生産する
- 明治41年 三共合資会社(後の第一三共)により、品川硝子製造所跡地を買収、製薬工場を建設
- 明治44年 現(株)テーオーシー立地に星製薬(株)創設。「ホシ胃腸薬」の販売や民間初のワクチン製造販売を行う
- 大正2年 三共株式会社創設、世界初のビタミンB1剤を開発、生産する
- 大正3年 日本精工(株)、大崎駅東口(現大崎ニューシティ所在地)に本社工場を設置
- 大正4年 (株)明電舎、大崎駅隣接地に大規模工場を設置
- ★(株)明電舎、日本精工(株)の詳しいストーリーは「今昔物語」その19、20に掲載されています



明治、大正の頃から、目黒川畔へ、さらに大崎駅周辺へと続いた「ものづくり企業」の分布。京浜工業地帯の核として集約した姿が見て取れます。

※往時の企業の地図表示は、以後の街区整備等による経年変動により、必ずしも厳密なものではありません

明治の始め、目黒川流域に始まった製造業の発展は、やがて鉄道物流拠点「大崎駅」の誕生とともに、大崎エリアへと広がり、駅周辺には多くの製造工場の設置が相次ぎました。明治9年、日本初の西洋硝子工場「品川硝子製造所」が「東海寺」敷地に建てられたのを契機に、明治20年には耐火煉瓦製造工場「品川白煉瓦製造所」が居木橋のたもとに創設され、さらに大正の頃の大崎駅周辺には「明電舎」などの大規模工場が移設されるなど、この地は京浜工業地帯の核として日本の近代化を推進していったのでした。

塗料、医薬品、モーター、軸受開発 etc. の「事始め」まで、改めて知る大崎の実力

「ものづくりのまち大崎」が生み出した工業製品や生活用品の多くは、明治、大正の頃に日本で初めて開発製造された「事始めの製品」となっています。明治中期の洋式ガラスや耐火レンガ製造に始まり、後期には日本ペイント製造(株)による日本初の塗料製造、さらに星製薬(株)による民間初のワクチン製造も実現しています。また大正の頃、現「第三共(株)」の前身、三共(株)では胃腸薬「タカジアスターゼ」や世界初のビタミンB1の製品化など、大崎の地に医学の分野からも歴史的成果の史実を刻んだのでした。

また一方で、物流拠点大崎駅に近接する立地を得て、日本精工(株)や(株)明電舎なども躍進。軸受やモーター製造の分野にパイオニアとしての力を発揮していきます。

時代を先取りした先端技術製品などで、大崎再生へ

昭和の激動の時代、戦後の傷跡が残る製造業の地から「早く復興のノロシ」が上がったのも、ここ大崎からでした。高度成長期に入ると、かつて大崎駅前在ったソニー(株)の工場から生み出されるトランスジスタ製品など、大崎は技術集約性の高いものづくりによって、再生、成長を成し遂げていったのでした。

